

個体的生命観の敗北

ウイルスは、関係する世界のなかに生命基盤をもつと感じている。自然と自然の関係、自然と人間の関係、人間と人間の関係のなかを巧みに漂い、泳ぎながら、その生命的世界を再生産している。おそらく、一個のウイルスがひとつひとつ独立した生命体だと考えるのは誤りだろう。ウイルスは関係し合う生命であり、今日的に言えば、そのネットワーク自体がひとつの生命体なのである。つまり、関係し合うことによる共同生活圏を確立する生命体だと思えばよい。だからその多くを抹殺することに成功しても、何らかのきっかけがあれば、変異しながらネットワークを再構築することができる。

本当は、人間もふくめて、同じような生命体なのである。呼吸をすることによって、食事をとることによって、人間はたえず自然との関係を成立させている。さらに人々との関係、歴史や文化などとの関係のなかで、私たちは生命の再生産をしている。この関係が持続すれば、たとえ個々の人間は死を迎えることはあっても、人間という生命世界は展開しつづけることができる。生命の基盤は個別性にあるのではなく、関係性の方にあるところ人間は一人ひとりが個別的な生命体だと

思っている。私は私だけで独立した生命体であり、すべての人が同じように独立した生命をもっている、と。そういう精神現象を伴いながら生きていくのが人間である。

内山節

プロフィール
1950年東京都生まれ。哲学者。存在論、労働論、自然哲学、時間論などについて考察。NPO法人・森づくりフォーラム代表理事。1970年代から東京と群馬県上野村を拠点として暮らす。『労働過程論ノート』（田畑書店）にて文壇デビュー。おもな著書に『内山節著作集』、『主権はどこにあるのか』（ともに農山漁村文化協会）。趣味の釣りに関する著作も多数。

現在の新型コロナウイルスの問題は気持ちが悪い。どういうウイルスで、どのように感染しているのかもよくわからないという気持ち悪さもある。さらにこのウイルスとともに展開している今日の世界も気持ち悪い。国民としての自覚が求められ、政治家たちは強い指導者であることを競争しながら、不気味な「全体主義」が広がっていく。この状況に免罪符を与えているのが、証明されていないことを真実であるかのごとく語る医学という名の科学であり、国家の権威だ。これは近代社会がくりかえし遭遇してきた災難のかたちである。

だがこのふたつだけが、現在の気持ち悪さをつくりだしているのではない。関係のなかで生きるウイルスというみえない生命体の拡大が、個体的生命だと信じる人間の生命の世界をむしろ狭めていく。すなわち誰もが依存している生命の基準が、みえないウイルスによって虚無化されていくことに、人間は根源的な気持ち悪さを感じている。

12 みんなく Information

14 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界
バスケットリーに満ちた供物の世界
中谷 文美

16 みんなく回遊
毛皮、必需品から見栄え重視?へ
齋藤 玲子

18 シネ倶楽部 M
マレーシアの光と影
——「斧は忘れても、木は覚えている」
信田 敏宏

20 ことばの迷い道
「嘉玲」が帰ってきたよ
野林 厚志

21 次号予告・編集後記

月刊 みんなく

8月号目次

- 1 エッセイ 千字文
個体的生命観の敗北
内山 節
- 2 **特集 ヒトと感染症**
ミアズマ説再考
——新型コロナウイルス感染症の流行に寄せて
門司 和彦
- 4 中国医学の可能性
——新型コロナウイルス感染症へのオルタナティブ
飯島 涉
- 6 感染症対策の担い手と物の配置
——西アフリカの事例から
浜田 明範
- 8 感染症対策と人びとの参加
白川 千尋
- 10 ○○してみました世界のフィールド
バリ島トウガナン暦カレンダーを作る
山本 泰則